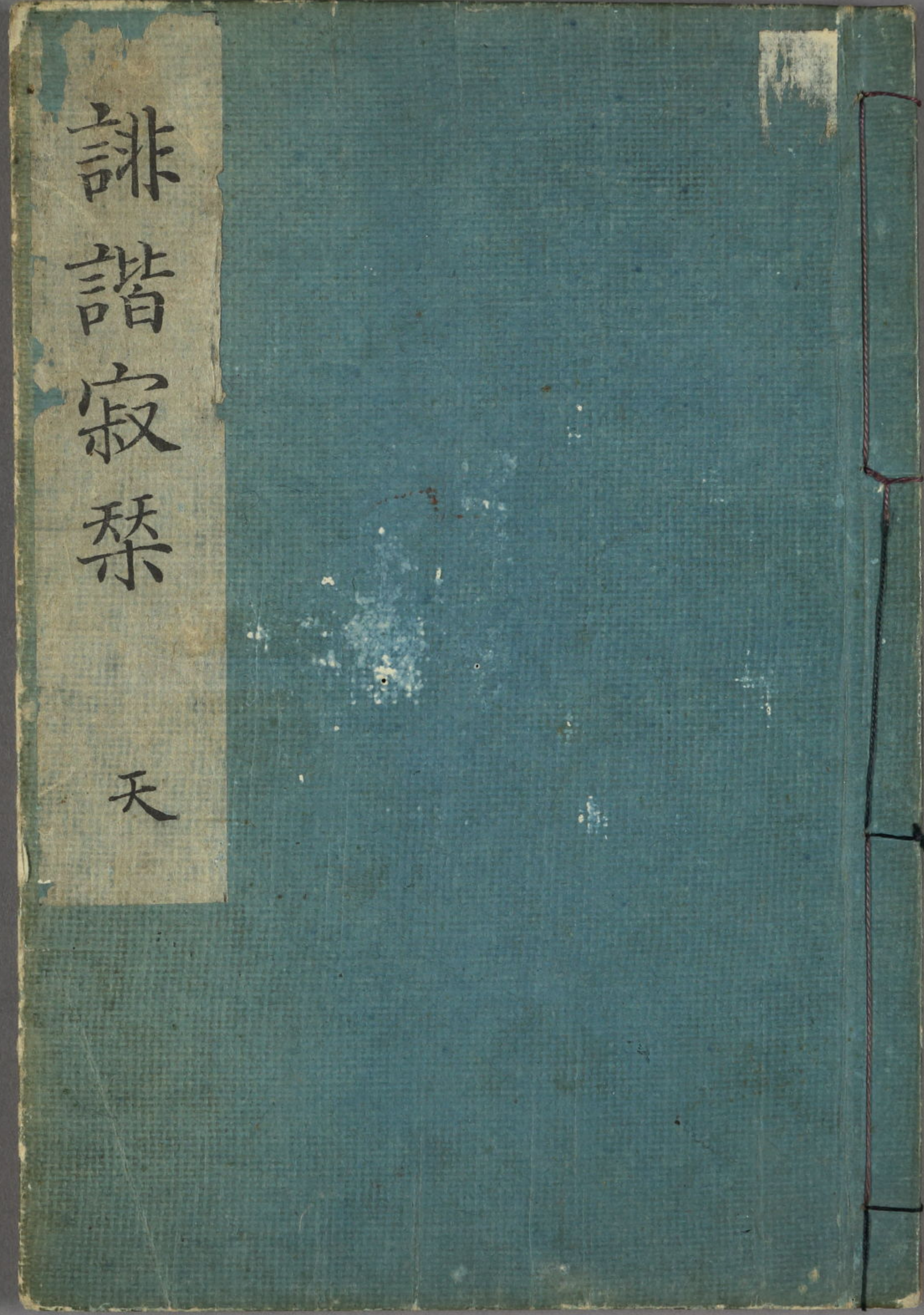


誹諧寂禁

天



春秋蒼弁白雄著 拙堂老人補

誹諧竊琴 全三冊

江都製本所 英文藏

東山居士卯亥俳諧竊琴

うゝのうゝと推乃と由た

かゝれと東とて梅書八三

かゝれと東とて梅書八三



此後宜しく古書を讀み

て其の旨を尋ね

て其の意を明し

て其の理を究む

此の道は古の書に在りて

先づ其の初めを

尋ねて其の旨を

尋ねて其の理を

家業と母初とる海に病と
治るは海に母又水未
若くは心は母に
きこ邪に始るは母に

じ母と後の人と
么乃をけらばは後を
方と授けし母の母に
むし醫と母に醫師に

河字の海に幸しくなる如く
しるすに心ゆく如く
可樂の友の心ゆく如く論
しるすに心ゆく如く

幸す還す如く

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

如渡齋主人

所れをさくみねもさくしつれをさくまき
 かくる白坊、えくくひもさる高野木も
 一葉をあらたみんりのしり著比一徳の
 いふはみねアタツれをさくハス祿の
 正し此仙記をかいつくさくたふひち
 長きそんはしおろれくはけし
 のしりまのせりりるまはん山仙を
 のしりまのせりりるまはん山仙を
 又化のち申のちか
 又化のち申のちか
 又化のち申のちか

序

可解不可解之一語不啻我詩
 之論可以論俳諧歌也夫俳諧
 之為歌僅二十一字為一首言簡
 意深宜哉其妙處在可解不可
 解之間焉白雄居士此撰解其
 可解不可解之妙要而得拙堂
 主人之增補其書初備矣今茲

壬申之夏刻成以予之共白雄氏
 有舊請題數言時新闢小園
 移花種竹日就園丁之事華觀
 撥者數旬聊書之以記姓名而已
 江戸詩人詩伴老人大産行
 序



凡例

- 一 此書安永選本寛政選本二品あり
 安永本亦ありて寛政本よりき文
 あり寛政本よりありて安永本よりあり
 文あり今寛政本よりありて考後
 (安永本よりある文を坊補せしもの
 もあり)
- 一 章中より補とある以下之皆坊補也

天中 詩伴

文あり又三曲行の文めをうのよ
補とあり一章半増補
よよ補とあり一章半増補
めを句よ補とあり四句の増補
又章中よ補とありかく音書
補いあるも只昔物の皮あ
ぬれ

一 従来字を平めを
魚魯鳥馬馬の誤

さすも引出あるも引出の元
うり悉く改む
人ふ志々々ぬ此の
有明の月野の長明とあり
兼好法師は改む
とを紙と書入
のまのめを
ま同

一 是て異体のみ

或人集よとちよるも歌名をとふけら
ちり

一 各章の初えふ祖翁の巻の巻をよむと
西風の規矩と水も其余の巻子同友
乃雅吟あて流るとさるべき風のそ
載と又鳥酔の巻の巻をよむと
なり撰者白雄らるるをのせよ今増補
形して白雄及び青子流友の巻をよむ
の巻も亦白雄の巻の巻をよむものせよ

一 世よる門弟の巻よむとあてあてし
その也故よ甚篇尾よ

世一書ハ祖翁の遺語をりよむし
去来叟の筆のあてを流流しけと
る醉居士の夜話をあてよ二巻と
形道よよらりしある詞友の巻を
あて他見をさるるといふりや
争いをのうふへきやれり同門の
おし法よよめりての禽獸よむ

そのたのあま

かゝのまじ語あれとも徳友のまじり
 是をも公よせんとあまの罪をまじり
 徳して且増補を加へんを上梓も
 若くはあまよつて正風の徳はよる徳の
 人あまより徳んてまじり罪も亦減却せん
 一 少年の人産業のひさある時まじり徳を
 ぬきまじり徳をまじりまじり多くまじり徳を
 の名をまじり且年中のまじり古き

古きまじりまじりまじりまじりまじり
 あままじりまじりまじりまじりまじり
 對してまじりまじりまじりまじりまじり
 たり又光るまじりまじりまじりまじり
 故まじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじり

拙堂老人傳

俳諧寂琴目録

俳諧寂琴目録

上の巻

流諧の亀鑑

一丁ヲ

姿情の事

五丁ヲ

三の情の事

六丁ウ

俗情の事

八丁ヲ

詞情新古の事

九丁ヲ

換骨の事 反替

十丁ウ

同業の事

十一丁ヲ

俳諧寂琴目録

一字のそとをうけてる意法源のそと 十丁ヲ

文字あまりのそと 十丁ヲ

文字のそとをうけてるの優をばけるそと 十六丁ヲ

文字をあまうてゐるのそと
すまうてゐるそと 十七丁ヲ

一句の繁そと 同ウ

歌題のそと 十六丁ヲ

句のそと 十九丁ヲ

火ともあふらゝあそと 十六丁ヲ

漢語のそと 十六丁ヲ

和歌のそと 十六丁ヲ

古事古語古歌古待のそと
けうこきこころ 同ウ

名詞をばける法 十六丁ヲ

名詞をみりいあそと 十六丁ヲ

名詞のそとをうけてるのそと 十六丁ヲ

名詞のそとをうけてる古歌或は古歌
みりいあそと 十六丁ヲ

名詞のそとをうけてるのそと 十六丁ヲ

名詞類聚

けいふあまのこゝろのまじり
源一三三三

名詞ふらふらとて詞あつる
廿丁ウ

神祇
廿三丁ウ

釋教
廿三丁ウ

憲
同ウ

旅
同

祝
廿四丁ウ

贈答
同ウ

餞別
廿五丁ウ

留別
廿六丁ウ

哀傷
同ウ

述懐
廿九丁ウ

懷舊
同ウ

再讀
卅丁ウ

發句の体

ききここやちまゐる
同
そあやうぬる
同
ふくきくすふる
同
ほそくかひるる
同

名詞類聚

古今和歌集

卷之三

影をみよふはる
出まあるる
おのゝきる
色をりてのる
感懐あるる
鏡相
生影を對を鏡お
よはえををさるる
一作あるる

四十二ウ
同
同
四十三ウ
同
同
四十四ウ
同
ウ

回文

物の名

四十五ウ

中の巻

照の事

二
フ

才三の事

六丁ウ

聯句他季うけまの事

九丁ウ

二句一意の事

十一丁ウ

おもひを乃事

十二丁ウ

名所をうゑる事

十四丁ウ

志まよふ所の事

十五丁ウ

大勢の中の人をさくむる法

十六丁ウ

さゆを月的事

同ウ

他の季の記短々の花揺乃る

十七丁ウ

古今和歌集

四

あけけるの事

あけけるの事

十九丁ヲ

恋句の事

十八丁ヲ

句々々の事

十七丁ヲ

聯句二々の同理屈乃事

十六丁ヲ

聯句諸路のあつらひ

十五丁ヲ

聯句自他の事

十四丁ヲ

下乃卷

くはくはあつらひの事

其一情の事

十三丁ヲ

廿二 理屈の事

同ウ

廿三 さうさうの事

二丁ヲ

廿四 りのふはささるの事

三丁ヲ

四 雨

四丁ヲ

四 月

同ウ

四 風

五丁ヲ

廿五 尚書かけあそび

七丁ヲ

廿六 古附古新あはさるる事

同ウ

廿七 題の文章あはさるる事

八丁ヲ

廿八 依よさるる事

九丁ヲ

廿九 二依けりあはさるる事

十丁ヲ

三十 見まはさるる事

同ウ

三十一 さあさるる事

十一丁ヲ

三十二 さあさるる事

十二丁ヲ

三十三 さあさるる事

十四丁ヲ

三十四 さあさるる事

同ウ

五

才十五一の自他のり 十五丁ラ
才十六其人の意せらるるのり 十六丁ウ

禁句の事 十九丁ラ

不易流行の事 同ウ

負外

十五の哉のり 十八丁ラ

十五のや乃事 同九丁ラ

これこそおきき水きおのり 同十三丁ラ

目録終



俳諧寂茶卷之上

白雄坊選著

拙堂増補

古池や蛙 飛こむ 水の音 翁

道のきりの木 槿と馬と 喰せりり

この二る蕉門の要領也つとめてる人

おころひや 蕨と 喰あは 海苔の砂 翁

やこそ死ぬるも 人も 喰あは 砂

身もくも 喰あは 砂の一葉哉

上

法苑珠林

十一

あのをとち福はるを事うたりり家 翁
此秋を何う年うれをうりる
やもかゝもなりくやをの北尾花

四時の観相はゆり歯牙の味ひて正風の
首領志る也

補

玄音法平曰古奇と見たり先抄をえん
あ、我義理をとりてさて義理あ、
つらぬうれを分別さへ、色長
得失よあてられ教なるへ、能得も又志る
今毎う再三吟して余義理よあてくる
あ、古今人の一致あるに於て何事
のう西風の音をゆり、只十七文

う、あての、解もろ瓜うとよ人まとい、
味、くさる、妙處志る、か、あ、あ、
た、と、句、く、か、ら、は、は、は、
捨、る、う、う、う、解、か、あ、あ、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
け、て、味、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
なり、中、是、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、も、か、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
は、は、は、は、は、は、は、は、
白、も、も、も、も、も、も、も、も、
初、く、く、く、く、く、く、く、く、

法苑珠林

十一

古今和歌集

十一
六

向き次の章ふゆりぬ

三の情の事

余情を深き子志くはたり一白乃
が一あももゆる人余情の浅深よき
ふぬり通情ををるくよこりぬを
ちやうよ親み朋友の情をささるる
まのまのさあやのり女の意のりる
あんといははをを情よあはるとい
るなり情をあはるといふ已の
情あはてぬ人なりおをりぬ情をま
はら若中の中あはる出あ

補

情の言かふあはるの意をり
しとといふよ一とていふ
なり縁一とていふ一とていふ

おもむきをりぬ

枯枝ふからとのやほむりの秋の暮 翁

寂一と情あはるといふ

秋とまあふあはるといふ

さあはるといふ

寂一と余情をふりぬ

海よりかけて流るる花のそく流るる 凡兆

よと一と情かるといふ

さあはるといふ

さあはるといふ

古今和歌集

十一
七

定家々曰詞ハ三代集ハ出る多ク
能事も亦之を新らし〜
用〜
或曰能事ハ俗後平作
俗後平作ハ歌連歌よつり
詞もは〜
あも〜

こむ〜
ハ是を俗後平作とハハ歌連歌よ
け〜
ハ又新詞り〜

賽浅

も用意教るり花乃森 去来

祖翁曰たの事〜

あ〜
詞を細工〜

詩ハ詩語あり文ハ整字あり
り〜
新詞〜
花の事〜
細工〜
評曰上〜
〜
〜
〜
〜

ゆゑにすくなくまこと云はれぬを
婦人又行しくいぬあはれいささしく
おあつたうきうきうきうきうきうきう
つめぬぬをのゆわのとりくそをのゆく
はうぬあつたうきうきうきうきうきう

換骨乃事補反替

補換骨とて詞同くしてうきうきうきう
てあるはいつうり

あめいハ唇を〜秋の風 翁

唇や唇を〜秋の風 許六

吹牙お〜たう〜て唇の秋の風を
あて換骨を志す人

又

修朝の歯くもきし奥の店 翁

唇か〜て猿の歯を〜空の月 其角

其角曰け後反替して猫の歯を〜
とも海人の歯白〜もあれふき乃
一俵を結く〜んぬを等数に難やめく
あ〜は〜は〜るの骨をば〜 あらさ
味いあさつむる〜

補

徐陵鸞鸞賦曰

山雞映水那相得 孤鸞照鏡不成雙
天下真成長會合 無勝比翼兩鸞鸞

八

上

黄魯直題畫睡鴨曰

山雞照影空自愛 孤鸞舞鏡不成雙
天下真成長會合 兩鳥相倚睡秋江

又

鬢為愁先白 顏因酒斲紅 樂天
短髮愁催白 衰顏酒借紅 右山

こころこころと換骨の待たしなり

ほろこころとつるからぬあつむき
まゝあかぬの月そのころの涙

後徳寺主文臣

有る月とあんのやほこころと
たむとあまのわこころと

宇治前執政

こころこころと換骨あつむき歌あり

又

人の親のかゝるよほひりり雀のま 鬼貫
雀のほろあつむきりり人の親 大馬

こころこころと換骨あつむき作し

人の親の焼野の雀よあつむきりり 曉臺

是とあつむき乃鬼貫あつむきりり
こころこころと換骨あつむき作し

補 同業の事

あはれなき

三十一

首の毎年のみりて又せりのなみ高 翁
まよ牛志のまをを又せりの風乃状 許六

去来曰同業のるあるる

桶の梅やきりて鳴かむ憶悴 昌房
石くえて歎嘆やむ月あふ 居行

こころのるをりのそらうちおとろきと
鳴かやまもる競い同業こたけ形容を
けいこころすてあてまおしこのを
同業とも又同業ともいひあふるま
ゆきむむゆこのころあふ

あつてくふ身をい流き夕の光 宗次

けりる自の句をまうくくゆるあめく
のけさめりいひて口體をあつてり
出さるるまを他より入て別ふ
魂を入きていりあふ

人酔く散りく人の麻ふが 柴居

かくりの形容を同しるあつて自他
のころちめて句を天地懸隔形の
同業及語の類をすぬ

補 一字のまをあつて句を浅深の事

徳翁曰一むりり十七又まあ
一字のあつてりあつてりあつてり
徳翁曰一むりり十七又まあ
一字のあつてりあつてりあつてり

あはれなき

三十一

或集り

くよそくも幸ふ初時 翁

こま一句の意を解せざる友かく
入集りしみのなほむくも幸ふ初時
いんさる時を風船の移るを失ふ

汐鏡の孤村に 帰る秋の暮 保吉

或曰世々孤村あるといふを
ききこまあるしといふは亦一を解
こる人こるのと下句をたのま
秋の暮の寂と窓とくこるを換
あり一を會せよしては亦あ
宵月散らかすといふは亦あ
こるこるしといふは胸中 洒落

光風霽月の如く後の夕陽の如く
いよめく眼あけの幽境古和清音あり
是一字のむくこるを解せざる
汐鏡よかこるのこるを解せざる
一を解せざるを解せざるを解せざる
海一を解せざるを解せざるを解せざる
るよあおみおのりこるを解せざる
何れ何を別れおとすおとす人

文字あはれは事

そと風暴風して鹽ふをきく哉 翁

蒲三英やまよるぬ者の口は草 山 店

有夜海の波をかきつけてかゝる人の

八

七

山嵐雪

山嵐雪

まじりくも嵐の宮めし鳴りけりぬ 山嵐雪

鳴りけりぬとありてそあつのささめし
感落しあつく鳴りける懐棹の今も鳴
けりぬと喚秋の吟あるあてまじり

くもくも降しあるまじり三輪の
このくもくも降しあるまじり

くもくも降しあるまじり

一句の禁さすい形ありや

朝よさへたをたふのかたき 翁

たふのかたきとあひまらうらむし
風雅の情實中をたふのかたき

きりれまうしゆのつまじり

ふりし新編八人の碓氷とて 山嵐雪

越人へ挨拶のむらり
そしめより女部志の女といふまじり
碓氷の碓とていふまじり
碓氷の碓とていふまじり
碓氷の碓とていふまじり

歌題碓氷題の事

補

歌題しる歌あゆ碓氷あゆ碓氷
あゆ碓氷あゆ碓氷あゆ碓氷
あゆ碓氷あゆ碓氷あゆ碓氷

五言

上

神垣やおもひのかきや 涅槃の像 翁

綿ぬきや 杉風や けしき 野水

角融よりたうらや 秋の唐紙 嵐雪

暁の流波をうらや 念仏 其角

こころをいふ能く歌あり能く歌ふいふのあり
洞中まじりてのり 幽玄よつていひくま
落入中まじりてのり

かこく来ぬ屋をうら乃 梅 柳 翁

雲をうらや 解ふ 薫する 椽の先

はらうまの 春中 又て 母の 林下 二 曲 翠

五月もや 磯のあふれ 菖蒲 椒 嵐雪

かろくろや ぬきそは 歯や 秋の風 杉 風

まきのあふれ けしき 正持衣 立 志

應くくといわたり たくや 寺の門 去 来

いづくも 花時あかきぬ 瀬田の橋 走 草

是等も歌歌なり能く力けよきも
まじりてのりかろくろのり
歌歌能く類と別まじりてありあり
福と能く類と別まじりてありあり
とれまじりてのりありありありあり

五言

上

吟ふるかゝるは流石めき事なるをうらふ
却て延まてゝおの吟めり西余の心
亦しく多くはなす

補火を由水子いふ事

清補う勇気おたり能く火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり
いふ事とてふ事あり火を由るあり

枕吟ふるまけいれはる雑音の声 公翁

かたうかた秋をめぐるとふ葉の花 支考

是を火ををめぐるといふ事
おのちおある事

嘆うえてはる久しき物と保を
あつたる花とていふ事

これらも同じ類の事あり

白雄曰火ををめぐるといふ事とてふ事あり
一語をのく際とていふ事とてふ事あり
あつたる花とていふ事とてふ事あり

漢語をばす事

馬とて馬とて残夢月達し茶の糖 公翁

小舟の中山の吟あり

杜鰲鳴也湖多のこく通る 文庫

好まてせよといひあまをあまのこと残る
湖多の歌は皆漢語のゆへに正風あま
落花端午涼夜あまのけりあり
元日 灌佛 名月 蠟八 寒食
こまのの題のゆへに漢語あり

補 蝶 葉

よれらるる古のりし 剣あまをこま
和系者流ゆへにまきくと漢語ゆへ
用ふるは能くまをこまゆへに
あり

名月也游るふりく七小町 翁

順禮よりうちまをりし 嵐雪

一角のうらよふらうらも、登る人
あまの言ふあり

和歌の言ふをけり事

紙まぬのぬるもあま雨の花 翁

袖よりあまのけり月より 素堂

先よりいふて言ふをまて能く
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに
ゆへにまをりて能くまをゆへに

和歌のうゑはあはれ作のまふあやむ
ふくろをましくぬの下のまふあやむ
なりゆくもあしそむの修りく
へくま

補

りやうりもほのくとほし柿の葉 貞徳

ふくろの和歌のまふあやむをけうらむ
古の流りぬそふあやむのまふあやむ

朕や世を河一曳の山かせと 春暁

ふくろのまふあやむの流り

古事一古語古歌古詩あつるの白法

知足軒新居の賀

ふくろの雀のうらふおむの粟 翁

淮南子説林云

大厦成而奠雀相賀

ふくろの雀のあむの粟とあらふ

撰集抄云中勢元輔扇の哥二首
すくろの雀のあむの粟とあらふ
このふくろの扇のあむの粟とあらふ
すくろの雀のあむの粟とあらふ
扇のあむの粟とあらふ
ふくろの雀のあむの粟とあらふ

ひまらふ小塚の庭そねりにし哉 公羽
吟はすもやあまの匂いの捨るの 岱水
ほりぬもさ誠の友人を頼みてむ 素牛

こころしうもあひあそせまきるうちりそ
新よまよしうましそ名あゆのうあそむる
あそむ必あひあそむるあそむるあそむる
古和名の匂くを考ふるあそむるあそむる
てそそ路の匂をいつい出せりあそむる
なり
古人曰くあそむるそのひしすれもあそむる
あそむる人あそむる治川のあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる

ひまらふ近江の人とみえきり 公羽

補 猿蓑集云望湖水惜春とそそあ
あり或はあそむる送別とそそああり
一時の程あそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる

五月あそむるの浮るあそむるあそむる 公羽
と并寺の門あそむるあそむるあそむる

あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる

あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる
あそむるあそむるあそむるあそむるあそむる

八島ありて

海人かあよあまごいこむ海をけ 千箇

伏見の舟船

あしのらあよ一落かあま夜哉 路通

まゝ保ありて

はらのらも鬼このもひと源 雉舟

瀬向ありて

我弱の皆あゝくあ人橋のを 湖春

是等やま皆を和りあゆのそそを

あゝいさそあありさる也そそあ情ありて
うり景あおをさるうむさといてあまそも
一法ありい他の名ありまそそあれさる
やうよあねへ

名新ふのそそ古歌或古さを思ひ
あそよる事

鰈あまあまきあゝああ風あね 公羽

あまあああの大悟をみりいひそそあ
向あああああああああ
西行の涙をさるい増賀の信を感
こゝにああ

おえまゝあまあああああ

あまああああ

あまああああ

らんきく西よよめを伐るる言
東よよめを院くもの鏡の色
なほの底よこころの寒き雪
繡石とりつゝ白きとひよせ

高取の城の空をよそしむ山 其角

うしやう山の吹あり

救世大士をみつゝをそめて
勾欄を穿るるかゝりて寛
形るなやぬをそのせむむり
山みりりの風をよめ時の
梵をよめよめくく樹をよめ
ゆくくくくくくくくくく
をみつゝ繡のたらしし文
飾りやうはくくくくく

もきききききききききき
不保の地たることか

新橋のく大親まきのやまうめ 白雄

初瀬の吟たのま

初瀬の吟たのまの細き許六の風俗文選等の
を撰りてよそしきりてのらうまのあそび
虚よあそびの類を書るる文飾りたる
よそしきりて虚より虚よ走るへくくくく又俗
中の俗言鄙言の交りて事々々の文の
軽尾としてえらりたるものも今の文の
えらふ多し西京龍をよそしきりて事々々の
結合せしむるゆへに終るよ出せし文ま
をうく味ひ

新橋のく大親まきのやまうめ

白雄

初瀬の吟

神祇

ふらうとらの皆やめいぬは遷宮 翁

梅つち湯とらの流の若のまき 丈草

昔の昔も和光の塵のまきりか 許六

他流よりのまき音連声等のるり風
子よの細さうとらけきさきをさ
るうたさう

森清記ぬきさき

梅つちのまき鏡今約ま

ふらの類い神祇ま納のまきさうと

畢旦音香鏡の吟皆けら後ゆたりの
ま納よまあうさる神祇まきまは

釋教

親まよの華丸えやうり花の雲 公羽

おあはしよむのくもは山哉 般亦貞

法然上人五百奉忌

以て代まや一扱の法のみき 露沾

まゆゆりあまうたの神祇まきり
けきさうとらけきさうとらけきさうとらけ
の句よまき用たり

神祇

世

三

窓

紅梅也えぬ急けく玉公廉 翁
秋ひくも吹く推さるきて森ぬ夜 荷分
虫居の目さる枕多る哉 文洞

窓のほとくはあまのこ
歌のちと歌旅あまのこ
自のおもひのえと旅は甲なり
細くさすのふあつをさす
何のちとあまのこ

旅

舟より脱てじろふ有ぬ衣 翁

草はくくら母うう人時回む 山川
その詠ふ推さるありてあまのこ 文章

旅舟のちとあまのこ
ととと古のちとあまのこ
旅のちとあまのこ

祝

先脱く梅をさるのみさるま 公相
駒を拜領せし人へ

時よよし脚さる馬を 秋ま 酒堂
其の角は新宅め

世もあまのこにさるよりの月 涼菟

旅舟のちとあまのこ

世

三

親の句よりきて自他親疎を以てする
る一

贈答

醫師何より力やめて

茶搦よりけの花をその由ら

公羽

婿縁落柿あそ二合

野薺地也くさや麻の子あまは

曾良

夏枯系物ゆふ初節も名新我

元兆

縁のりてあそ一とあは

けうくそ子親啼き風言あそ

助叟

同人を待つ

鳩眠るも木取くもやそ新瓶

言水

葦舎子翁を中

おのろふ相うさり人を所月夜

土芳

りくあちくく六時を叶の庵

斜影

中あそふ縁もあや校舎を忘せ中

如行

或人子同あそ

けあそえさるりあはし炭あそ

木因

あそ

あそ

あそ

みづの日記をよめてなると

君えよやふまのつらき葎の桶 嵐雪

務名の句を自他親跡をよみてなると

饞別

獺のふふんとくまを流田の裏 公羽

翁の首途をぬくる

公相根の志くまふ日を乾ひるり 由之

友りる孤をよめる

雲をあやまらしむもぬしる 野坡

綾糸の句自他親跡をよみてなると

印留別

川崎あましくよつらふ

まゝの跡をちかふはむ別をい 公羽

まゆをくくぬ日

思ひまらふ静の秋をくくぬ日 素心堂

途中あまふ別をよめる

行くもきりしきりまよふも秋のふ 曾良

留別の句む自他秋縁をこきまよふ

哀傷

門人嵐園の鹿すううふ

秋風の折るかおきききき木の杖 公翁

其の角の母をじまのふ

郊のむよくおきおそすあすの

公翁のこころ

何のゆもたつこふあゆぬあゆの菴 槐市

あつたつや膝をかかへてみるあゆま 野坡

翁の送其母

あつたつや膝をかかへてみるあゆま 其角

翁の送其母のこころ

あつたつや膝をかかへてみるあゆま 北枝

母をこころししたる

あつたつや膝をかかへてみるあゆま 其角

公翁のこころ

北

其角

妻をよむるのうた

水も月の相のひびきもさるる

野水

あつたね

州の歌のあつたねと踊

落梧

あつたね

あつたねもあつたねもあつたねも

尚白

あつたね

あつたねの月もあつたねの月もあつたね

去来

あつたね

あつたねよかたひのうた

あつたね

あつたねもあつたねもあつたねも

史邦

あつたね

あつたねもあつたねもあつたねも

鬼貫

追悼

あつたねもあつたねもあつたねも

あつたね

あつたねもあつたねもあつたねも

許六

舟の幸田

花よりうけいなる夜にうら

其角

なたる工齋のこゝろ

二人の奔ふさくともあふの風

菊のさたけいふあやう
おんせうか恨もよも
さあ

志ぬ人の志づきいふさくさの下

元翠

哀傷の向む自他親疎を
脱脱答候ふ別哀傷とて人

對しつゝの向りたるも
あはれあはれ

精いつ代も涙あふえ春乃時

わづらふとわづらふ人
時よもわか涙あふえ春乃時

あはれつゝの向りたるも
あはれあはれ

迷懷

花よりうけいなる夜にうら

花よりうけいなる夜にうら

葉かきこころんても朝魚の浮世

野坡

懐舊

高館の古戦場みそ

夏草や兵やもろみみの伝

長

扇のほろひく庵のあそび

よこよこを叶少綱洗ひく伝もこれ

曲翠

舟を夢よりくらく

昔のまをゆにじいまの乳房

風洗

画讚

穀骨の画

稻けきや教のよき伝るるの穂

翁

源氏の画

傘持の月よみくくはあこの柳

其角

花女の絵

よのかく伝もよてあるを園の月

鬼貫

布袋の画

大虚涼く禅師の指のさく所

其角

人麿の繪り

月夜の鏡なまらりけり 月夜 方磨

儂ハ他の句よりつゝるる

ふりのとどくは軽し ひとのこ

其の角の句は何うか 集よ東塔の鏡
出せり 自のるふりていふて 儂なるる
笠重吳天雪とつゝる 儂を及 轉の
句より とも角のころか 儂なり

又かゝりの 儂なり

あのやうな書名の 儂なりかじり

ふりてをよむる 儂なり 儂なり 儂なり

つゝのきやうなり けやうなり 儂なる
ふりては 是れ 荻門の 舟より 待り 有聲の
画 画をよむ 声の 待り 古人の 儂
なり 故よ 儂なる 画の 餘情を 儂
なり

青嶽也 古 皐 由 徳 春 の 色 素 堂

つゝる せし やらも ぬら けり 荻 の 花 公 羽

きかぬ 桐の ひと 荻 や 荻 の 花 其 角

此を 荻 荻 の 三 幅 對 の 儂 なる 是
等 亦 あり けり

補 或人 荻 亦 鳥 の 亦 画 亦 秋
の 荻 の 荻 亦 亦 亦 亦 亦 亦

蒼蒼如く霞をさす由野人亦秋の暮 白雄

幾句の体を通りての句

キキキキキキキキキキキ

花の香を清くよみたる浅きを 公羽

うろくともて竹圍り竹下哉 去来

志しうていふあそびをい出せられ 沾蓬

とてうてうてうてうて

汐哉や鶴睡ぬきて海涼し 公羽

名月やあそびのうへも松のかげ 其角

来るの晴く鶺鴒のひくのまに 桃賀

ふくくくくくくくくく

杜宇大にぞくぬけりも月夜 翁

湖をのめゆきさうらもあ月る 去来

若くはうらたふくゆふのけし 杉風

ちびくかきいもるる

とてあふあふあふあふのあのおを 公羽

いとあふ又うらうらく日影も 露路沾

けしあふあふあへ掃くそまゝいと 丈草

とてあふあふあふあふ

とて

とて

艶々たる句

ぬきとてゆく人おめしむる秋
公羽
蜀魄おなじれらるる秋はきを
菊齡
花より葉やひらきよるる秋
支考

幽玄なる句

秋の木の葉とゆきよき句ひの
公翁
やうして秋の心はむすぶ
山川
名月や新と寺の葉のあふ
昌房
みらしきころ

初生の葉たてあやしく人輪あやせん
公翁
形ふる花見る人乃長刀
去来
黄鶴也二非五合の歳年首
曲翠
色ももるる

卯のむやうふ柳のめいひはし
公翁
身ぬるひよき向の雑草の緑うれ
轍士
志く流やゆけく擋り下りち
塵生
感情なるる

酒のえいしき床をたおの重
公翁

ひし毎おの掃のまふにぬかたりのおの
一髪
ほくくおと繪をへる秋の扇か
小春

觀相

首の紫の表えきり今秋の表
公羽
空もむらうをたるとを櫛か
木節
海となく地をさふさの表也
越人
は頼り対と観お
翁
飛をうてをくおくふ静ふか
翁
矢のとり母の乳をのむ鹿のふか
立志

炉をえくふ命はまほし措の儀
似草

ふいとてやのれまゝるる

春のにおの掃よぬを志すいりの
翁
較そとぬふ舞の浮揚かふ也
其角
おのてまの朝いとふくふ危
不角

又

灌仏の日ふ春はまふ麻のまふ
翁
虫ありや猫の爪く周果経
西吟
盗人の錢なくそこの中くか
来山

さへき

止 盤

又

きりぎりのこもをさしぬき時の繪のましまし
公羽
たつきうや女その紙の扱の色
鷺水
かきくたの扱や繪への百人一首
許六

又

艦の舟流をうけて揚水る扱や洞
公羽
ふたはまはなほ葉い蓮風情をこえ
素堂
ふんふん扱よけはるたのまきねらむ
揚水

一作ある句

床より扇を解ふいづもまきこき
公羽

馬をうる扱も枯木のあじし哉
曲翠

とえきみて紙幅をたぐるまき
荷分

くまの句くを侍意くわの句や
くまの句くを侍意くわの句や
古人曰一律しあるまきこき
りあはれのまきこきをのまきこき
ひあはれをのまきこきをのまきこき
句くをのまきこきをのまきこき
句くをのまきこきをのまきこき

回文

はらのあのをきくやまきむねのけむ
おしげ波白くまなほくしれ
卜宅
氷花

物の名

精 詩 膏 結 醜 答 書 書 時 居
うけらる人時只くまなほくしれ
菊峰

加 衣 衣 ね 糸 八 雁 水 井 院
鴨くまなほくまなほくしれ
立吟

田文物の名好くまなほくしれ
かくのくまなほくまなほくしれ
あくまなほくまなほくしれ

くまなほくまなほくしれ
あくまなほくまなほくしれ

能諧寂琴卷之上終

